

日通寺古墳

岡山県阿哲郡大佐町教育委員会

序

我国は、戦後30年の歩みを経て、経済、社会機構は共に著しい伸張変遷を遂げた社会において、近年富みに問い乱されている課題は、人々の心のふれあい、ふる里見直し、地域の伝統文化再確認などであることは周知のところだ。

この度円通寺古墳群の一角が、円通寺墓地整備作業中、偶然にも発見され、埋蔵文化財の適切な保存処理方を協議し、認可を得て町独自の予算にて古墳の発掘調査並びにこれの復旧に当たった次第です。

調査した古墳は千数百年間全く人手にかゝらず、阿新地方では最大規模のものであり、数々の貴重な資料が発掘され、予期以上の成果を成し得たことは同慶に存じています。

発掘調査に当っては、大佐中学校田仲貴雄教諭の夏期休業中献身的ご協力とご指導を賜り更には、調査の概要、今後の参考資料を本書に編纂して下さいまして、衷心より敬意を表すると共にその労多しを謝すものです。又地権者円通寺様をはじめ多くの関係者のご協力に対して、深く謝意を表します。

円通寺古墳の発見、調査を契機に文化財の保護啓蒙をはかると共に、本書が古代史研究の一助になれば幸いと存じます。

昭和53年3月1日

大佐町長

川 添 岩 男

例 言

1. 本書は、昭和52年8月1日から28日まで調査を行なった岡山県阿哲郡大佐町大字永富に所在する「円通寺古墳」の発掘調査報告である。
2. 円通寺古墳の発掘調査の主体者は、大佐町教育委員会池田宏教育長、事務担当は同じく金田与志雄教育次長、福吉幹人社会教育主事、発掘担当は大佐中学校教諭田仲漢雄である。
3. 町当局・町教育委員会・町文化財保護委員会からは多大の援助を受け、円通寺児玉裕住職、村上工業村上保社長には墓地造成に多くの支障を持たずにもかかわらずご協力をいただいた。また、伊三木壽平、塚本茂夫、木名昭三、杉井邦彦、児玉正の諸氏には、夏の暑いときに直接発掘に協力いただいた。記して謝意を表したい。
4. 本書に用いた標高は、すべて海拔高である。
5. 本書に用いた地形図は、大佐町が国土地理院の承認を得て作成したものを複製したものである。
6. 遺物の整理、報告書作成は田仲が行なった。

題字は大佐町長川原岩男

目 次

序	1
例 言	1
本 文	1
第一章 地理的・歴史的環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
第二章 発掘調査に至る経過	5
第三章 発掘調査	6
1. 古墳の立地	6
2. 古墳の概要	6
(1) 墳丘および周濠	6
(2) 横穴式石室	7
(3) 埋葬設備および遺物の出土状態	8
第四章 出土遺物	13
1. 装身具	13
2. 鉄器	14
3. 須恵器	19
第五章 考 察	29
あとがき	30

図 目 次

図1 大佐町内遺跡分布図	3
図2 円通寺古墳周辺地形図	5
図3 横穴式石室平面図	9
図4 横穴式石室排水溝平面図	10
図5 横穴式石室排水溝平面図(墓石除去後)	10
図6 棺台および出土遺物配置図	11
図7 棺台配置図	11
図8 釘配置図	12

図 9	遺物配置図	12
図 10	装身具類実測図	13
図 11	鉄器実測図	15
図 12	鉄線実測図	16
図 13	釘実測図 1	17
図 14	釘実測図 2	18
図 15	須恵器実測図 1	20
図 16	須恵器実測図 2	21
図 17	須恵器実測図 3	22
図 18	須恵器実測図 4	23
図 19	須恵器実測図 5	24

写真目次

写真 1-1	横穴式石室羨道（入口側から）	31
2	横穴式石室袖部（玄室側から）	31
写真 2-1	玄室奥壁	32
2	玄室側壁（東側）	32
写真 3-1	棺および遺物出土状態	33
2	棺および遺物出土状態	33
写真 4-1	遺物出土状態	34
2	遺物出土状態	34
写真 5	装身具および鉄器	35
写真 6	鐵	36
写真 7	釘	37
写真 8	須恵器 1	38
写真 9	須恵器 2	39
写真 10	須恵器 3	40
写真 11	須恵器 4	41
写真 12	須恵器 5	42
写真 13	須恵器 6	43
写真 14	須恵器 7	44

第一章 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

岡山県阿哲郡大佐町は、岡山県の西北部にあり、西は新見市と、北は鳥取県と、東は岡山県真庭郡（旧美作国）と、南は岡山県上房郡とその境を接して、南北 2.1 km、東西 1.0 km と南北に長い町で、全町面積 122.6ha、山林 108.6ha、水田 4.4ha の山村である。一級河川高梁川の一支流小坂部川の水源地帯となっている。小坂部川は、鳥取県境にその端を發し、諸所の谷水を集めて小坂部に至り、刑部低地（沖積平地）を形成し、布瀬を通り、さらに南に流れて美敷湖（人工湖）を経て、新見市唐松にて本流の高梁川に合流する。大佐町における水田は、刑部低地に南北 2 km、東西 1 km のまとまりが見られるので、その他の大部分は谷水田あるいは小坂部川沿いの狭い水田が散在している。水田は狭いが、牧畜・林業がさかんで、牛は特に大佐牛と呼ばれ、この牛の蕃籠乗りは有名である。

大佐町の南半は、吉備高原の北端となっていてその標高は 500～600 m を測り、吉備高原を開折してできた小さな谷が発達しており、この部分が谷水田として利用されている。また、北半は中国山地の南端部を形成している、標高 1152.8 m の礪山など 1000 m を越える山もいくつかみられ、急しゅんな地形を呈している。刑部低地から田治部にかけては、第三紀の舌状の丘陵がよく発達している。礪まじり黄褐色土の第三紀層の上に第四紀の粘土化の進んだ黄色火山灰が堆積しており、その上を“黒ボコ”と呼ばれる黒色火山灰土がおおっている。この黒ボコが現地表面を形成しているが、いわゆる火山噴火に伴って降下したままの火山灰と、降下した火山灰が風によって舞い上がり再堆積したものがあるがその色別は非常に困難である。大佐町を含めて新見・阿哲地方に一般的に見られる“黒ボコ”がどの火山の噴火に由来したものであるかは、現在のところ研究が進んでいない。第四紀（特に洪積世）の粘土化の進んだ黄色火山灰の研究も岡山県ではその緒についたところであるが、岡山県阿哲郡神野原遺跡では、黄色火山灰土層の中から後期旧石器時代の遺物が出土している（注 1）ので、大佐町内における黄色火山灰土層も今後注目すべきものの一つであろう。

集落遺跡は、舌状丘陵上、その縁辺部あるいは刑部低地内の微高地上に見られ、現在の集落の多くは、その丘陵の縁辺部に位置している。

また、刑部低地の縁辺部には、小坂部川によって形成された 2～3 段の小段丘がみられ、この段丘上に現在の集落が載っている（注 2）。

注 1 「野原 A 地点発掘調査報告」「岡山県埋蔵文化財報告 7」（岡山県教育委員会 1972 年刊）

注 2 大佐町の地形・地質については、滝田澄正「大佐町の地質・地形」「大佐町誌」（大佐町 1979 年刊）にわたくし記述してあるので参照されたい。

2 歴史的環境

歴史的環境は、大佐町内遺跡分布図(図2)を参照しながら、時代の古い順に概観していくことにした。

旧石器時代の遺跡・遺物は、現在のところまったく確認されていない。しかし、阿哲郡神野町野原遺跡で、この時代の遺物が出土しているので、大佐町内でも今後発見される可能性は充分にあるといえよう。

縄文時代の遺物は、羽山の円山遺跡(1)・天治の戸谷遺跡(2)(注1)・永富の太寺遺跡(3)の3箇所において各1片の縄文式土器片が採集されているが、遺構は確認されていない。縄文時代の人々がこの地に足を踏み入れていたことを示す材料である。旧石器時代のもと同様今後その数を増していくであろう。

弥生時代では、中期前半以前のものは確認されていないが、太寺遺跡において中期後半の土器片が数片採集されている。水稲耕作をやっていた弥生時代人が、この時期に大佐の地に入ってきて、谷水田を利用しながら定住していったものであろう。

弥生時代中期の遺跡は、現在1箇所が知られているのみであるが、後期になるとその数も増して、千谷の脇遺跡(4)・永富の円通寺遺跡(5)・同じく塚の元遺跡(大佐中学校校庭内)(6)・天神山遺跡(7)・小南の小南遺跡(8)などかなりの数にのぼる。脇遺跡では磨製石器丁が採集されており(中期の遺跡との複合も考えられる)、円通寺遺跡では、特殊壺(特殊器台に伴うもの)(注2)に類似した小型直口壺片が採集されていて、集落だけでなく墳墓の存在も予想される遺跡である。多くが舌状丘陵上にあるのに対して、塚の元遺跡や矢作遺跡(9)は刑部低地内の敷高地(自然堤防)上に形成されている。丘陵上のもとの自然堤防上のもとの間には時期差も考えられるが、それを裏づけるには現在のところ資料が充分ではない。

古墳時代の集落は、現在の集落と重なるためか1例も確認されていない。この時代の墳墓である古墳はいずれも後期に属するものばかりで、前期の古墳は1基も発見されていない。後期の古墳は、横穴式石室墳を主体とするもので、焼田山古墳群(10)・大山古墳群(11)・津原古墳群(12)などは4~11基が群集している。これに対して、円通寺古墳(13)・神野古墳(14)・麻古墳(15)・塚の元古墳群などは1~2基で存在している。これらは単独もしくは2基のまとまりであるが、本来は数基の群集墳であったと考えられる。

これらの古墳は、群集してあるいは単独で存在し、いずれも小規模であるが、その中において円通寺古墳は、新見・阿哲地方では最大級の横穴式石室を有するものである。永富に、新見・阿哲地方屈指の豪族の存在を予想することも容易である。

奈良時代の遺跡は、戸谷遺跡(2)が知られている。この遺跡は、中国縦貫自動車道大佐サービスエリア建設に伴って調査されたもので、隅方形の住居址1軒が確認されただけである。この遺跡は、大佐町南端にあって西にのびる舌状丘陵の南斜面に位置している。この時代の遺跡・遺物は、戸谷以外では確認されていない。

平安時代の遺跡・遺物は現在のところ確認されていない。

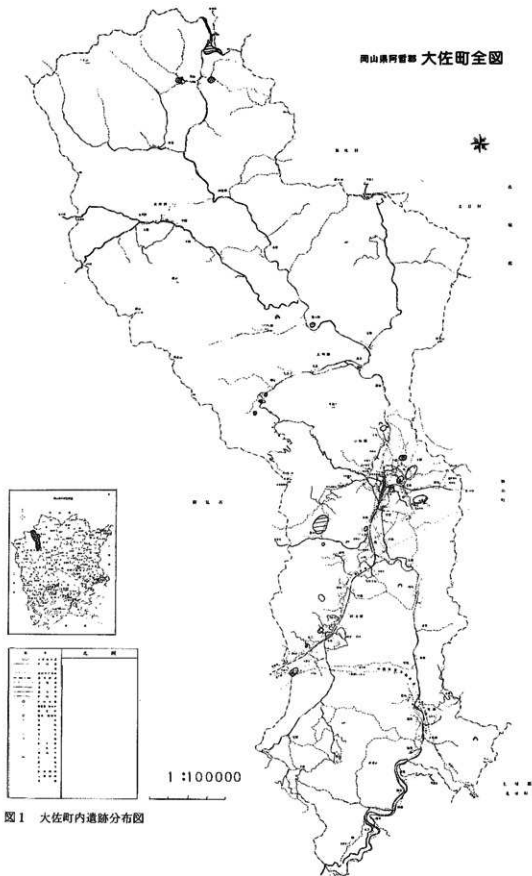


図1 大佐町内遺跡分布図

第二章 発掘調査に至る経過

鎌倉時代の遺物を出す遺跡として、大寺遺跡をあげることができよう。遺構は確認されていないが、備中南部の龜山で焼かれた龜山焼の破片がかなり出土している。骨磁器として利用したものであろう。

鎌倉時代以後の中世と呼ばれる時代は、この地も戦国の波にさらされ、各地にその遺跡を城址という形で残している。北から葛畑城址(16)・割亀城址(17)・矢作城址(18)・円通寺城址(19)・周防城址(20)・安本城址(21)・大山城址(22)などをあげることができる。矢作城址を除いて、他の城址は山上あるいは尾根上にあるが、矢作城址は小阪郡川の自然堤防上に築かれたもので、一種の「沼城」といえよう。

製鉄関係の遺跡は、鉄穴井手・鉄穴場・たたら場など多くのものが各地に散布している。鳥取県境近くにある大井野の大鉄穴遺跡(23)では、東西80m・南北150mの鉄穴場に2本の水路を付設しており、西からの1本は水口から切り端まで延長350mで途中2箇所に池をつくっており、東からの1本は途中の山腹にトンネルを掘って水路をつないでいる。2本の水路は共にその水口は、柏智の園に位置している。柏智の人がやって来て採集したという口碑をうらづけるものであろう。製鉄遺跡の多くは、未だ山中に埋もれたままといえよう。製鉄遺跡のはほとんどは江戸時代のものであろう(注3)。

- 注1 橋本勲司 「戸谷遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』 岡山県教育委員会 (1976年刊)
- 注2 正岡睦夫・二宮治夫・田仲清雄 「西江遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』 岡山県教育委員会 (1977年刊)
- 注3 大佐町誌編纂委員会 『大佐町誌』 大佐町 (1979年刊)

この円通寺古墳は、昭和52年5月までは、その存在がまったく知られていなかったものである。真言宗普永山円通寺が、同寺の東にある墓地の拡張を行なっている時に、偶然5個の須恵器(4個は平城の完形品、1個は大塚破片)が掘り出され、それらはその翌日に、塚本茂夫大佐町文化財保護委員の手によって大佐町立大佐中学校に持ちこまれた。ただちに現地調査を行なった結果、横穴式石室を内部主体とする古墳が1基存在し、石室入口部の一部が破壊されその部分から須恵器が出土したものと判明し、墳丘については、墳丘上部に墓地の造成のための土砂がすでに置かれてはほぼ造成が完了しており、墳丘の形・大きさを知ることが困難な状態であった。墓地造成工事でこれ以上古墳を破壊しないように依頼し、岡山県教育委員会文化課へ工事中に古墳が発見された由を連絡した。その後、文化課職員も来町して現地視察し、文化課・町教委・地主・施工業者・町文化財保護委員等で協議し、現状のまま保存することとなった。

その後、墓地造成が完了し、その墓地への埋葬が行なわれると永久に目の見えないまま埋もれてしまい調査は今後一切不可能となるので、埋葬が行なわれていない現時点で調査を行ない、資料を今後有効に活用しようという考え方が町当局の中にてできた。

発掘調査に要する経費は、町予算でまかなわれることになり、その経理は町教育委員会社会教育課で行ない、発掘調査は田仲が担当することになり、調査は昭和52年8月に行なわれた。

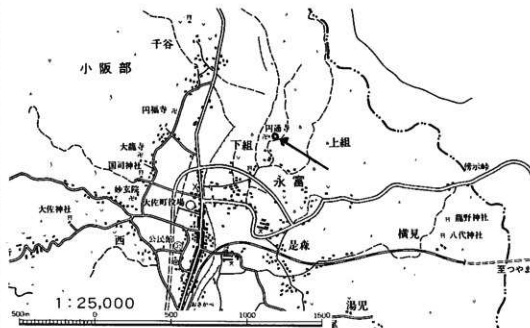


図2 円通寺古墳付近地形図 (→印の先のが円通寺古墳)

第三章 発掘調査

発掘調査は、昭和52年8月1日から26日まで実施した。調査は、墓地造成の既完の部分についてはできるだけ造成部分をこわさないように調査を進めることになり、後遺入口部分から調査を始めたが、狭道市があまり広くなく作業能力も悪く、石室のほぼ中央の上部にトレンチを石室の長軸に平行に設けて、そのトレンチ掘り下げを行なった。石室には天井石が載っていると予想していたが、一枚の天井石も残存していなくて、結局、石室内全体の埋土を除去するという方法を取らざるを得なくなった。

1 古墳の立地

刑部低地は、南北3.5km・東西1kmの細長い平地をつくっている（この平地は大佐町内では最大の水田地域である）。この刑部低地の東側には、第三紀層からなる低い丘陵が南西あるいは西方方向に多くびている。これらの丘陵上には、弥生時代の集落址や古墳時代の群集墳などがつくられている。これら低丘陵の内、最北端に位置している丘陵上に当古墳が存在する。

円通寺古墳の存在する低丘陵は、北北東から南南東にのびており、水田面からの比高は4.0mを測る。この低丘陵西斜面の麓には円通寺が建てられている。また、丘陵の西斜面には、円通寺の境内に繞って墓地がつくられている。この墓地の上方の斜面中腹に新しく墓地を造成中に当古墳が発見された。したがって、この古墳は、南々東にのびる低丘陵西斜面中腹に位置している。

この丘陵は、弥生時代後期に集落として利用され（墓地造成中に住居址・貯蔵穴の断面が発見されており、土器片も墓地の中であり採集されている）、古墳時代後期になると横穴式石室を主体とする古墳群（当古墳の北の松林の中にも横穴式石室をもつ古墳が発見されている）がつくられ、戦国時代になると丘陵頂部に円通寺城が築かれた。円通寺城の築城工事、その後の墓地造成のため丘陵全体は、本来の姿でなく、人工の力が加わり、かなり形を変えている。

2 古墳の概要

(1) 墳丘および周濠

この古墳の墳丘および周濠については、発見当時すでに墓地の造成がほぼ完了していたので、さだかではないが、工事による断面に出ていた周濠の断面の観察などから墳丘の径は約15m位であったと思われ、巾1.3~1.5mの間濠がめぐっていたといえる。墳丘は、横穴式石室の天井石が失くなったことと合わせて斜面のために封土はかなり流失している。工事前には、若干の封土の高みがみられ

たであろう。周濠も造成のため、その全様ははっきりしないが、横穴式石室の南々東の部分の周濠底には、須恵器の大壘片がたまたま存在していた。これは埋葬に伴う葬送儀礼の一部として大壘が運ばれ、この場所で打ち壊されたものであろう。周濠内の大壘出土例は、英田郡美作町の狼谷遺跡（注1）や新見市の横見古墳（注2）などに知られている。

注1 二宮治夫・松本和男「狼谷遺跡」『岡山県歴史文化財発掘調査報告7』岡山県教育委員会（1975年刊）

注2 岡田博・浅倉秀昭「横見古墳」『岡山県歴史文化財発掘調査報告15』岡山県教育委員会（1977年刊）

(2) 横穴式石室

円通寺古墳の内部主体である横穴式石室は、既成の墓地及び今回の墓地の造成工事によって、狭道の入口（狭門部）が破壊された。石室の現存長は6.0mであるが、遺物の出土状態から見てその長さは7m以上あったものと推測できる。

石室は、斜面に床が平らになるように馬蹄形に掘り込み、その中に構築されている。この掘り込みは、奥半分は第三紀層の黄色粘土に達しているが、手前半分は黒色火山灰堆積層を削っているのみである。

石室の石材は、長さが80~130cmのかなり大型の石を根石に利用し、石材の最も広い面をもって側壁をつくりあげている。石室の大きさは、玄室の奥巾2.40m・長さ2.90m・高さ（現存）1.80m・玄門部巾2.20m、狭道の玄門部巾1.65m・現存入口巾1.10m・現存長3.0m・現存高1.20mを測り、玄門部には、0.4m×0.6mで高さ0.8mの石を立てて玄門部を構成しており、石室は右片袖となっている。なお、天井石は一枚も残存せず、また、現存入口の外にも完形の須恵器が出土しているので奥濠は1m以上長かったと推定できる。天井石は、円通寺の甌石などとして利用されたものであろう。

石室の主軸方向は、N-8°-E方向を示している。

玄室床面には1条の石蓋排水溝がつくられている。玄室の東北隅に地下水の浸り込みがみられ、特に降雨後は多くなる傾向が認められる。この地下水を排水するため溝を東北隅から奥壁沿いに70cm西へ寄せ、ほぼ直角に曲がりS-15°-W方向に1.35m延び、その地点から少し曲がってS-60°W方向に0.80m延び、再び曲がってS-10°-W方向に1.10mに延びて、溝はなくなっている。この地点は石室床面の第三紀黄色粘土層が黒色火山灰堆積土層に変る場所であり、黒色火山灰堆積土になつてからは床面は約10cm低くなっている。溝の巾は2.3~3.5cm・深さは3~1.6cm・底の巾は1.2~1.5cmを測る。この溝には、奥壁から3.8cmのところから溝の南端から20cmのところまで、板状の石を並べて蓋としており、溝巾より長い石については床へたき込んでいて、蓋石の上端が床面とはほぼ同一レベルになるように蓋石を置いている。埋葬時は、溝の中・蓋石の上は埋まっていなかったものである（次頁参照）。

③ 埋葬設備および遺物の出土状態

玄室の中央奥壁寄りの所に、石室長軸方向に棺を置くために、人頭大の石を二列並べている。これらの石は棺合であり、この上に木棺に納められた遺体が安置されており（以下、第1被葬者と呼ぶ）、第1被葬者の埋葬に伴う副葬品を奥壁あるいは側壁沿いに片付けたのちに、第1被葬者の左に第1被葬者と同様に石を置いて棺合をつくり、その上に木棺に納められた遺体（以下、第2被葬者と呼ぶ）が安置されている。第1被葬者の右にも石を並べて棺合がつくられている。この部分からは、釘が1本も出土していないので、木棺でなく板に載せられた遺体（以下、第3被葬者と呼ぶ）が安置されたものであろう。

玄室内には、第1～3の3遺体が埋葬されている。羨道には遺物の出土状態からみて、棺合などは置かれてはいないが、2つの木棺が長軸に沿って縦に安置されたと考えられる（以下、羨道の玄門側の遺体を第4被葬者、羨門側の遺体を第5被葬者と呼ぶ）。

第1被葬者は玄室中央に木棺に入れられて安置されており、第2・3被葬者の埋葬に伴って副葬品が動かされているため定かではないが、他の埋葬遺体のものよりも多くの副葬品が置かれていたと思われる。また、5人の被葬者の内唯一の刀の所持者である。これらから考えて、この古墳を造らせた主人公であったと考えるのは容易である。

第1・2・5被葬者は、共に木棺に納められ、いずれも金環を持ち、第1・2被葬者は装身品の玉類を持っている。これら3人の被葬者は男性であろう。第3・4被葬者は副葬品もほとんど持たず、第3被葬者は板に載せられ、第4被葬者は板葬か木棺葬かははっきりしない。これら2人の被葬者は金環も玉類の装身品も持っていないので女性であったらう。

玄室の副葬品は、第1被葬者に伴うものが第2・3被葬者の埋葬に伴って一部片付けられた他は、原位置の出土と見える。追葬の際に破壊されたものの一部を除いて、大部分は完形ないしは、それに近い形で検出された。

羨道の埋葬が終わり、黒色火山灰土が羨道に流入（意図的に当時の人が入れたか？）後に、須磨器大甕1個の破片がはおり込まれている。この大甕は葬送儀礼に伴うものといえよう。

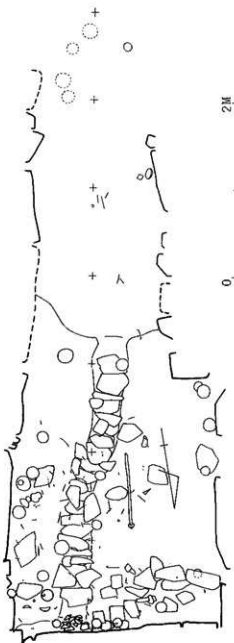


図3 横穴式石室平面図

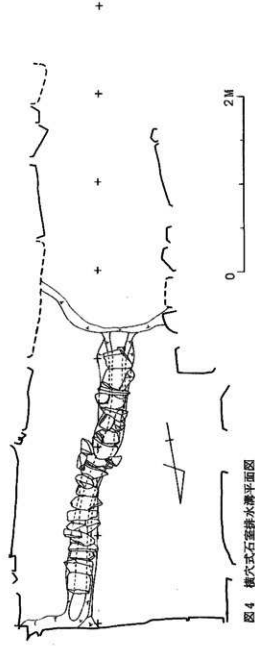


图4 横穴式石室排水溝平面図

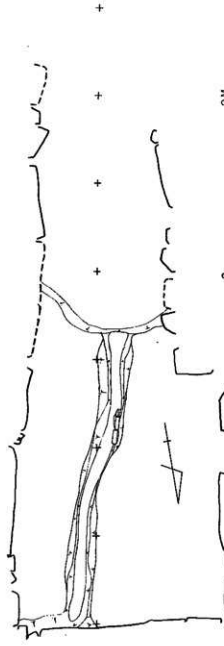


图5 横穴式石室排水溝平面図（取石除去後）

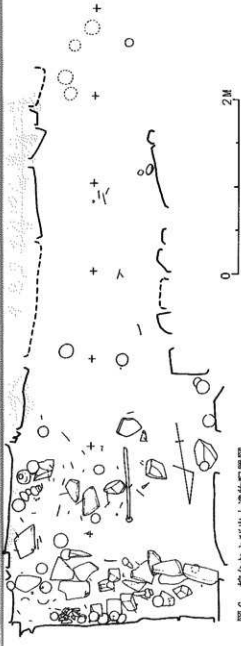


图6 横穴式石室跡上遺物配置図

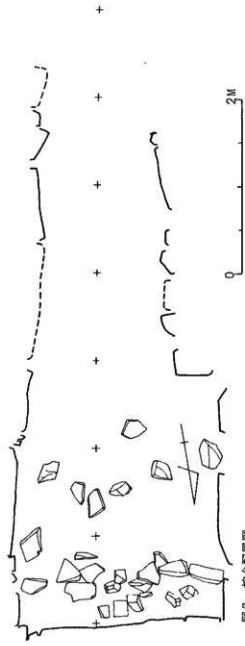


图7 横穴式石室跡上遺物配置図

第四章 出土遺物

出土遺物には、金環5・勾玉2・切子玉1・丸玉3の装身具類、刀1・鍔18・釵1・刀子3・釵1・釵1・止め金具1・釵1・釘50・不明鉄器3の鉄器類、小壺3・平瓶6・提瓶1・坏17・高台付坏2・罎1・高坏17・大甕2の須器が見られる。

1 装身具

金環(第10図1~4) 金環は5個検出したが、その内1個は玄室東北隅の浸透水のために腐蝕が非常に進んでおり、サビが環状に認められたのみで取り上げることは出来なかった。

金環1・2は、1対のもので、第1被葬者の持ち物である。1は、残存状態がかなり良く、環の外径1.9cm 断面は4.5×5mmの楕円形を呈し、銅地に金メッキを施しているがメッキは薄い。2は1と同様のものではあつたであろうが、錆のため金メッキ部分はなくなり、銅心のみが残っている。金環3は、第2葬者の持ち物で、2と同様に錆のため銅心のみが残っていた。大きさは、1とはほぼ同じ大きさであつたであろう。3と対をなすものは、調査時点にその痕跡を確認したのみで取り上げ得なかった。金環4は、第5被葬者の持ち物であるが、4と対をなすものは出土しなかった。4の外径は2.4cmと1~3に比べやや大きく、断面径も7.7×5.4cmと太くなっている。銅地部分は錆化が



図8 釘配置図

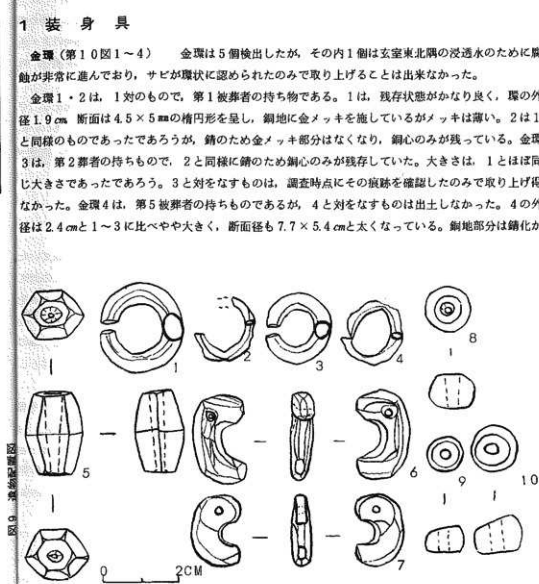


図10 装身具類実測図

進んでおり、金メッキ部分は良く残存している、その厚さは0.2mmを測る。

切子玉 (第10図5) 切子玉は1個のみ出土した。これは、勾玉1個・丸玉2個と共に第2被葬者の持ちものである。これらは、出土状態から見て首飾りとしたものでなく、足元にまともて置いたかあるいは足首に飾りとしてつけていたものと思われる。長さ2.25cmで、断面は六角形であるがややいびつであり、穴は上面から穿ち、最後に反対側の穴の縁をととのえている。この古墳唯一の水晶製品である。

勾玉 (第10図6・7) 前者は、切子玉と共に第2被葬者の持ちもので、後者は石室内の漆土をふるいにかけて出てきたものである。6は赤メノウ製で、長さ2.35cm・巾1.4cmを測り、頭の部分はややゆがんでいる。7は、風化の進んだ赤メノウの皮部分を使っていて、前者が半透明のアメ色を呈するのに対して、乳白色・茶色を呈する。これはやや小型で、長さ1.9cm・巾1.2cmを測り、外縁とくりの部分は半円形を呈する。

丸玉 (第10図8~10) 8・9は切子玉、勾玉と共に第2被葬者の足首近くから出土し、10は第1被葬者の足首近くから出土した。8は青メノウ製で、径1.2cm・高さ0.9cmを測り、きれいに仕上げられている。9は、半透明のアメ色を呈するガラス製で、中に金粉を少しまぜている。径は1.1cm・高さは5.5~7mmを測る。10は変成岩製で、径1.25cm・高さは7~10mmを測る。

2 鉄 器

刀 (第11図1) 刀は第1被葬者の棺に入れられ、遺体の左側に刃を外にむけておかれていた。さやなどの外装については残存物が無いので不明であるが、刀身の保存状態は良好である。この刀は、楕円形のつばとはばき金具と目釘1本が残っていた。刀身は長さ8.03cm・幅の厚さ6~5mmを測る直刀で切先は直線的に斜めに切っている。茎は短かくその長さは6.2cmにすぎない。茎には径4mmの目釘穴1個があり、刀の右側から目釘を打ちこんでいる。はばきには、巾2cm・厚さ0.1cmの鉄板を楕円形に曲げたものを使い、長径7.5cm・短径4.2cmの楕円形で厚さ0.2cmの鉄板をつばとしている。刀身に比して茎が短かすぎる刀である。

鎌 (第11図) 鎌は第11図に示すように方形広根斧箭式1・有茎広峰平造三角形式1・片造短刀輪寛被鑿箭式1・2・丸造短刀輪寛被鑿箭式1・狭鋒両丸造短刀輪寛被鑿式1・輪寛被鑿式(種先を欠く)2の計18本を検出した(鎌の形名……注)。これらの鉄鎌の大部分は、第1・第2被葬者の埋葬に伴うものと考えられる。2本の広根(1・2)を除いた16本は寛被鑿の延長部分が見られ、茎との境に突起すなわち轡をつけている。平根の2本を除いて、他のものは実戦的な鎌である(注)後藤守一「上古時代鉄鎌の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号 昭14年

鎌 (第11図3) 鎌は、第1被葬者の持っていた刀の直下から出土したものである。片端は断面が長方形の轡を付けている。刃部の形は柳葉形をしていて、鎌の側へ全体を曲げて鎌の刃を傾斜している。刃の材料と柄とは約60°の傾きをなす。刃の部分の長さは8cm(その先端の半分が折るためにその用をなす)・刃の巾1.7cm・茎の長さは5cmを測る。

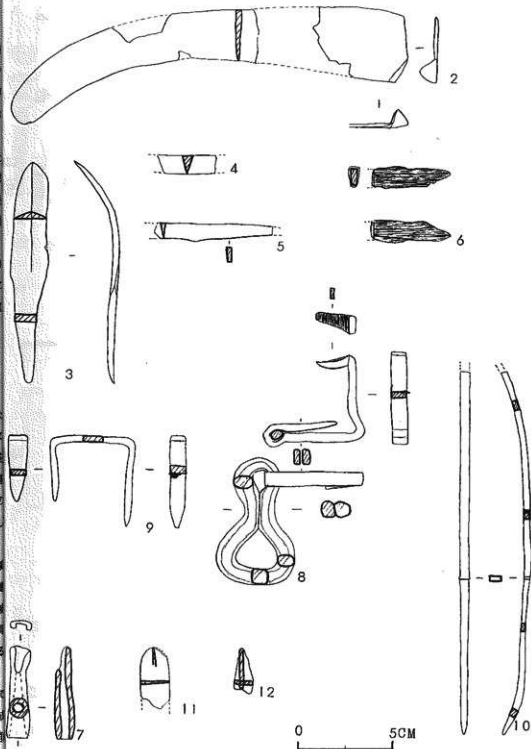


図11 鉄器実測図

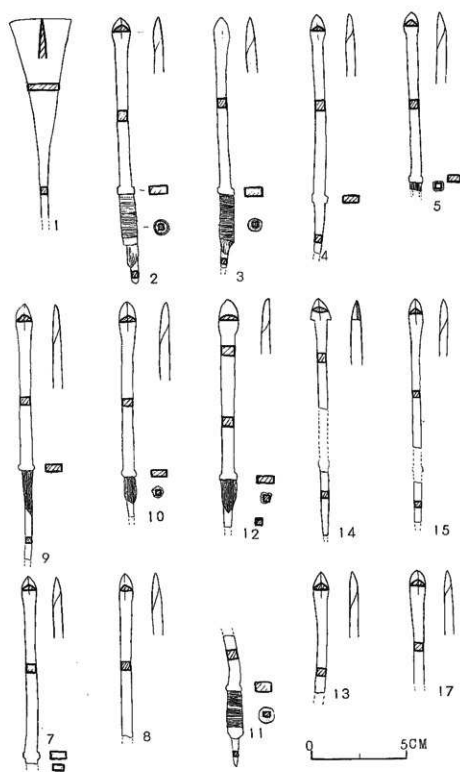
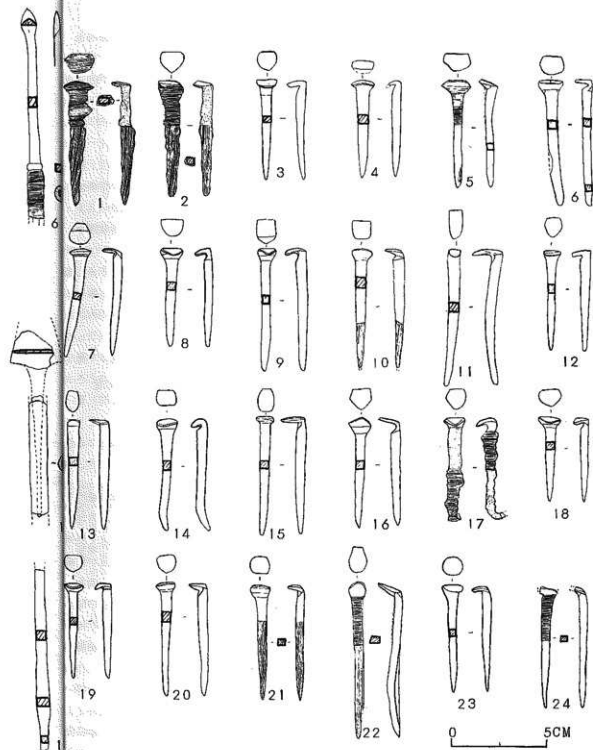


图12 铁钉实测图



第13 钉实测图1

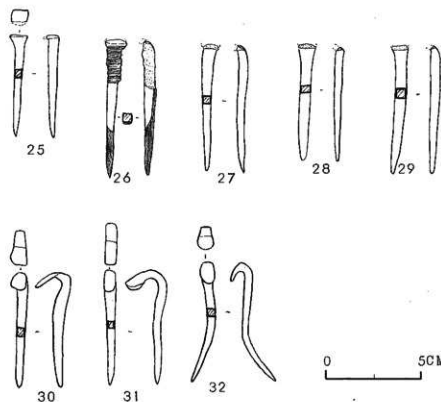


図14 釘突例2

刀子(第11図4~6) 刀子は3本出土したが、いずれも残片である。4は、刃部の破片、刃巾10mm・茎の巾5.5mm・現存長3cmを測る。5は、刃の大部及び茎の末端を欠いていて、刃部現存長2.2cm・刃巾8.5mm・茎の巾2mm・茎の現存長3.9mm・茎の厚さ2cmを測る。これは永く使われ磨きこまれている(元の刃巾は9.5mm以上)。6は茎のみが残存し、その外面には木質が付着している。この木質は、柄が木装であったことを意味しよう。茎の長さは4.1cm・巾0.9cmを測る。

鏝(第11図7) 鏝は、床面に設けられた排水溝の底で検出したもので、排水溝の蓋石の隅から転落したものであろう。排水溝はその時には埋まってなかったことを物語るものである。刃の部分を欠いているものと思われるが、袋部はよく残存している。全長4.8cm・袋部の長さ3.5cm・袋部の径1.0cm・袋部の穴の径9mmを測り、穴は刃部に近づくと細くなる。

鎌(第11図2) この鎌は、墓地造成工事によって出土したもので出土状態ははっきりしないが、入口近くの平砥(4個)の近くで出土したもので、第5被葬者への副葬品であろう。全長約2.5cm(一部を欠く)・刃巾2.4cm・基部巾3.5cm・幅巾3mmを測り、先端は丸く造っている。刃部の基部から3分の1あたりから大きく彎曲させている。基部の刃の側の角をほぼ直角に曲げて着柄した。柄の支えとしている。

止め金具(第11図8) これは、第4被葬者に伴うものである。これは厚さ1.8~3.4cmの板に取りつけられていたものである。8の字形に止め金具をつくり、これに厚さ3~4mm・巾8mmの鉄棒を曲げて足としている。片方の足の長さは3cm、他方は1.0cmあり、長い方の足は板を打ち抜いて直角に曲げられ、さらに先端部分を再び板に打ち込んでいる。これは、馬具の帯止め金具かあるいは木箱の掛け金具かのどちらかであろう。馬具の帯止め金具にしても木箱の掛け金具にしてもこれに共存すべき金具は他に出土していないので、どちらとも限定しがたい。

鏡(第11図9) これは第5被葬者の埋葬に伴うもので、巾10mm・厚さ3~4mm長さ12cmの金棒をコの字形に曲げ、両端を切りおとしてとがらせている。鏡の巾は4.4cm、足の長さは3.2cm・4.5cmを測る。何に使用していたかについては不明である。

不明鉄部(第11図10~12) 10は、第2被葬者の棺のすぐ南で検出したもので、先端を欠いているが、現存長19.5cmで、方形ないしは長方形の断面を呈している。鐵の棘様の突起があり、鐵とも考えられるが、全体に弓なりに彎曲しているので鐵の仲間に入れるのをためらったものである。もし鐵とすれば、茎の長さ8.5cm・寛披ぎの延長部分が11cm以上のものとなり、前述の18本の鐵とは別の形式のものであろう。11は、刀子片とも見られるが、刃はついていない。また先端は丸くなっている茎とすれば全体に薄すぎるものである(厚さ1.0~1.5mm)。12は、厚さ2mmの三角形を呈する破片で、端部は鈍のためはっきりしないが丸く終っているかに見える。鐵の平根部の破片であろうか。

釘(第13・14図、出土状態については第8図) 釘は全部で50本検出した。これらは、第1・2・5被葬者の棺に伴うものばかりで、この3人の遺体は釘付けされた木棺に納められていたと見ることができ、棺につかわれた板の厚さは、1.93cm・2.4cm・2.7cmの3種が釘に付着して残存している木質からわかる。釘の長さは、4.4cmから8.1cmまで数種(6cm前後のものが多い)に分られるが、同一棺において長さの統一は認められない。釘の出土位置が埋葬時の棺に打たれた位置に近いものに第2被葬者のものがある。20~24cm間隔に打たれており、それによる棺の長さは17.0cm、巾は7.0cmであったと推定できる。この第2被葬者の棺に伴うと考えられる釘の数は1・5被葬者のそれの倍以上となっている。17の釘のように2枚の板を打ち抜き、その先端を折り曲げているものもある。

3 須恵器

副葬された土器は須恵器のみで、土師器の出土はみなかった(石室の埋土中から若干の弥生式土器が出土したが、これは古墳周辺に弥生時代の集落の存在を裏付けるものである)。

平瓶(第15図1~6)

1~4は、墓地造成中に掘り出されたもので、渡部部の最後の埋葬(第5被葬者)に伴う須恵器の一部であろう。1は、胴の径2.05cm・胴の高さ1.41cm・口縁部張り付け部の径は5.6cmを測り、口縁部を欠いている。砂粒がかなり多く、青灰色を呈している。2は、胴の径1.63cm・胴の高さ1.12cm・口縁径9.0cm・口縁張り付け部の径5.0cm・口縁部の高さ5.2~6.2cm、全器高

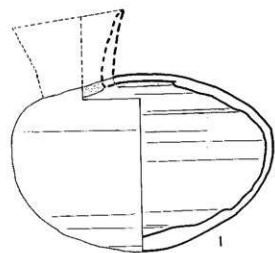
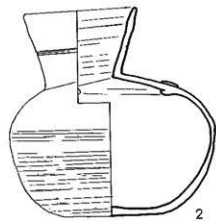
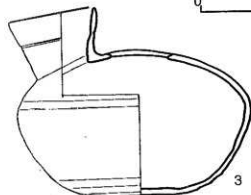


图 15 须惠器实测图 1



2

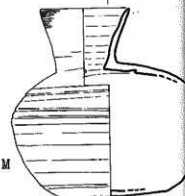
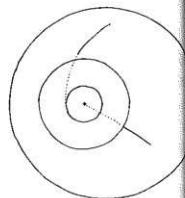


3

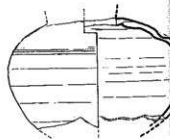
0 5CM



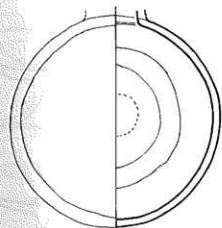
4



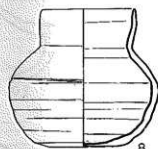
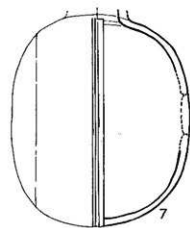
6



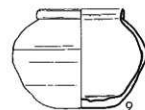
7



7



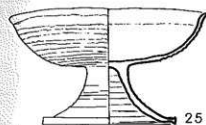
8



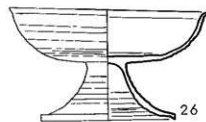
9



10



25



26

0 5CM

图 16 须惠器实测图 2

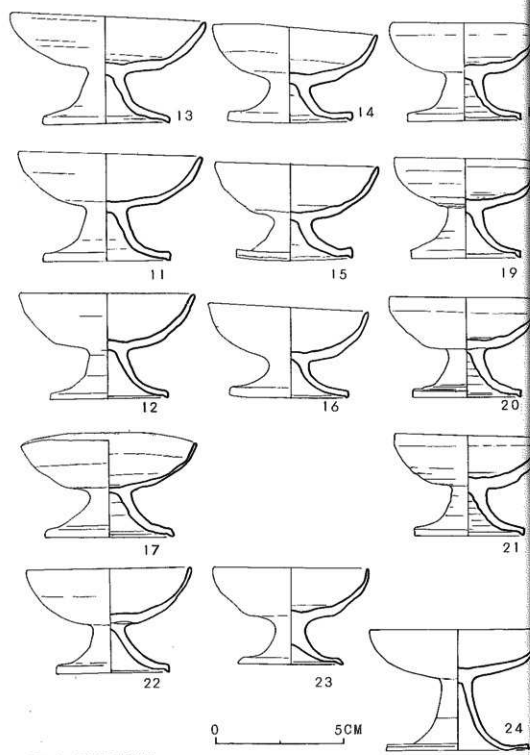


图17 须惠器实例图3

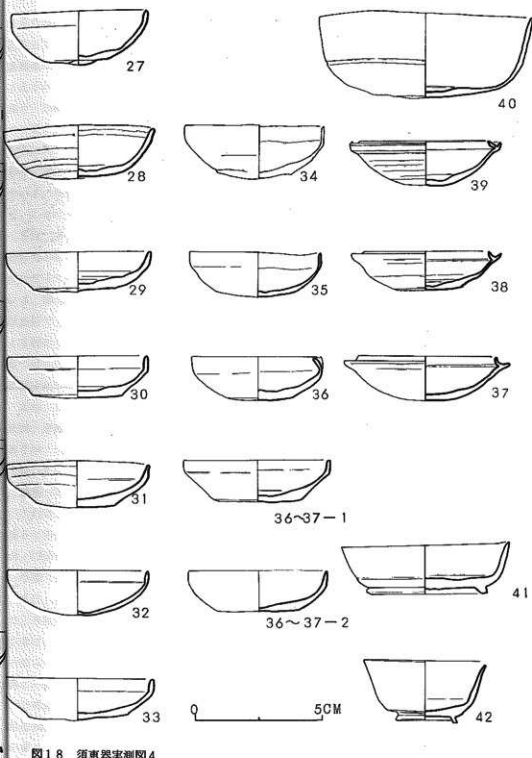
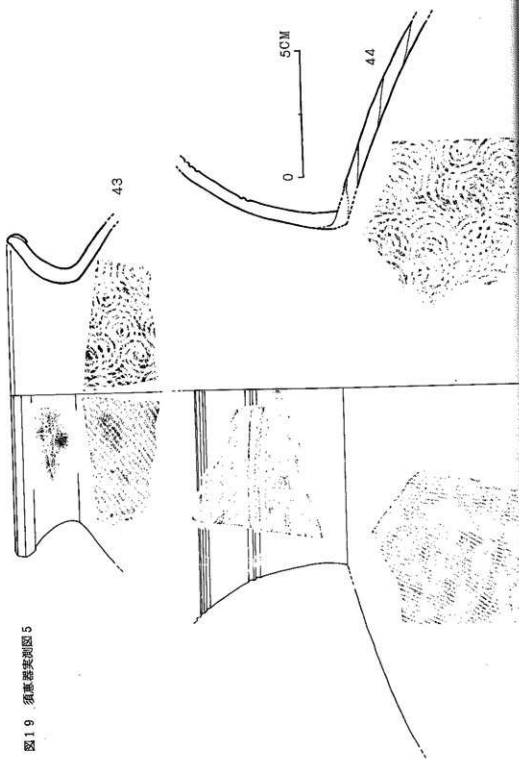


图18 须惠器实例图4



1 6.5 cmを測り、径1 3.3 cm・厚さ0.2 cmの粘土円板を1個張り付けていて、底は平底(径7.7 cm)となっている。口縁部中央に一条のへら切り沈線が施されている。焼成は良く、白灰色を呈する。當地造成中にスコップあたり、こわれているが、完形品である。3は、胴の径1 8.4 cm・胴の高さ1 1.6 cm・口縁径7.1 cm・口縁張り付け部の径5.2 cm・口縁の高さ3.7~4.5 cm・全器高1 5.0 cmを測り、口縁部中央に一条のへら切り沈線がめぐらされていて、底は平底(径6.9 cm)である。焼成はややく、胴下半の一部を除いて焼成温度が上昇しなくて瓦器状になっていて、灰色ないし乳黒灰色で、断面は乳灰白色を呈する。口縁端部を欠いている。4は、胴の径1 4.7 cm・胴の高さ1 0.7 cm・口縁張り付け部の径4.6 cmを測り、胴上部は須恵器を回転させながら構でなでている。底は丸底に近く作っている。焼成は良好で、白灰色~灰色を呈する。口縁部は、2・3がロート状になっているのに対して、これはやや外反してひろがっている。口縁端部を欠いている。

5は、第2被葬者の棺と東側壁の間で検出された。胴の径1 5.3 cm・胴の高さ1 0.6 cm・口縁張り付け部の径5.1 cm・口縁径7.1 cm・口縁部の高さ4.4~5.0 cm・全器高1 5.0 cmを測り、底はほぼ平坦になっている(径8.2 cm)。口縁部内面は、全面横でなされ、外面は上3分の1のみ横でなされている。胴上半にはわずかに灰がかかっている、白灰色~灰色を呈している。この平底の上面には、第1 5図の5の上に示すように、2本の刻線が見られる。へら先で細く浅い線をつけているが、口縁部をつける穴をあけるための目印と思われるものである。直線状のものは延長すると穴の中心に至り、弧状のものは穴の周上に至る。

6は、こわれた破片を袖部に置いてあったもので、底部と口縁部を欠いている。底部や口縁部の破片は、追葬の際に石室内を清掃し石室外に持ち出されたのであろう。胴の径1 4.2 cm・胴の現存高8.7 cm・口縁張り付け部の径5.5 cmを測る。胴部の肩の部分には、径0.8 5 cmの円形のもの(棒の先)で突いた凹みがある。これは円板張り付けにかかわる装飾と考えられる。

壺類(第1 6図7)

これは、第1被葬者の棺と奥壁の間で検出されたもので、追葬の際こわれ大部分の破片は、平瓶6の場合と同様に、石室外に持ち出されていて、一部の破片が残存のみである。胴の径1 6.8 cm・口縁張り付け部の径4.9 cmを測る。焼成は良好で、内面及び断面はうすい茶色を呈している。

小壺(第1 6図8~1 0)

8は、第2被葬者の棺と東側壁の間で検出し、9・1 0は第1被葬者の棺と奥壁の間で検出した。8は完形品で、9・1 0は一部を欠いていて、提瓶の場合と同様であると考えられる。

8は、器高1 0.9 cm・胴の径1 1.9 cm・頸の径7.4 cm・口縁径7.3 cmを測り、底は径5.5 cmの平底となっている。頸部から口縁にかけてはやや内湾しながら上方へのび端部はやや薄くなっている。胴部に一条の凹線を施して、外面の凹線より上部および内面頸部くびれ部より上部は横で行ない、外面凹線より下部はへら削り後なでている。胎土には雲母の微細片をかなり含み、焼成は良好であるが、頸部はややずれてつくられている。9は、器高7.8 cm・胴の径1 0.5 cm・口縁径6.6 cm・頸の高さ0.8 cmを測り、底は径4.1 cmの平底を呈する。胴の最大径部分はやや凹んでおり、縦凹線に

見える。頸部には、巾5mmの粘土帯をはりつたようになっている。胎土には径0.5mm前後の長石がかなり含まれており、焼成は良好で内外面とも暗灰色を呈し、断面はチョコレート色を呈している。10は、器高7.7cm・胴の径1.3cm・頸くびれ部の径5.9cm・口縁径5.1cm・頸部の高さ0.6cmを測り、底部は径5.3cmの平底様であるが中央がやや凸起している。口縁部はやや内傾しながら薄く残って線部をつづけている。胴部に一条の凹線を施し、底部の一部のみへら削りを行ない、外面のほとんどは横で仕上げとなっている。本来は蓋とセットになっていたと思われるが蓋の出土はなかつた。

高坏 (第16・17図11~126)

高坏は、第2被葬者棺と東側壁の間、第1~3被葬者棺と奥壁の間および第4被葬者棺の側の個所から出土した。奥壁の側から出土した高坏の多くは横われていた。これは追葬の時に横わされたものであろう。

11~13は、第2被葬者棺と東側壁との間で検出されたもので、酸化炎で焼かれており、灰沢感を呈しており、同一窯で焼成されたものであろう。11は器高8.2~8.8cm・口縁径1.45cm・脚高さ4.3cm・裾径1.0cm、12は器高8.2~8.4cm・口縁径1.39cm・脚の高さ3.8cm・裾径9.1cm、13は器高8.0~9.0cm・口縁径1.53cm・脚の高さ4.0~4.4cm・裾径1.00cmを測り、いずれも坏部と脚部との接合が若干ずれていて口縁は傾いている。

14~16は、第2被葬者棺と奥壁との間から出土したもので、この3個も一つの窯で焼成されたものである。14は器高6.9~7.8cm・口縁径1.33cm・脚の高さ2.8~3.1cm・裾の径9.8cm、15は器高7.7cm・口縁径1.29cm・脚の高さ3.2cm・裾の径9.1cm、16は器高6.9~7.5cm・口縁径1.27cm・脚の高さ2.9cm・裾の径9.4cmを測り、坏と脚のはりつたはやや傾いている。

17は、14~16と同じ場所から出土した。口縁は1.20cm×1.40cmの楕円形を呈し、器高7.3~8.3cm・脚の高さ3.7cm・裾の径1.02cmを測る。焼成は良く、灰白色を呈していて、径0.~1.0mmの砂粒を多く含んでいる。

18~20は、第1被葬者棺と奥壁との間で検出されたものであり、いずれも焼成はやや甘く、灰白色~乳灰色を呈していて、同一窯で焼成されたものである。18は器高7.6~7.8cm・口縁径1.7cm・脚の高さ3.7cm・裾の径9.0cm、19は器高7.8~8.1cm・口縁径1.6cm・脚の高さ4.0cm・裾の径8.6cm、20は器高7.8~8.0cm・口縁径1.22cm・脚の高さ3.9cm・裾の径8.4cm、21は器高7.8~8.1cm・口縁径1.20cm・脚の高さ3.8~4.0cm・裾径8.7cmを測る。坏部と脚部の合がわずかに傾いている。

22~24は、14~17と同じ場所から出土したもので、焼成は悪く、内外面ともに乳黒灰色断面は乳灰白色を呈し、瓦器とも見え、同一窯で焼成されたものである。22は器高7.5cm・口縁径1.5cm・脚の高さ4.5cm・胴の径8.3cm・23は器高7.5cm・口縁径1.6cm・脚の高さ4.5cm・胴の径8.4cm、24は器高7.6cm・口縁径1.15cm・脚の高さ4.5cm・裾の径8.4cmを測る。

25・26は狭道部の第4被葬者棺のすぐ奥で出土したものである。26の上に25を重ねて検出しており、砂粒(径0.5~1.0mm)が非常に多く含まれていて表面はざらつとした感じになっている。この2個の高坏は、他の高坏と異なり、口縁径が1.55cmと大きく、口縁端部は外反し薄くなっ

ている。2個とも同じ大きさで、器高8.8cm・口縁径1.55cm・脚の高さ4.6cm・裾径1.06cmを測る。25の一部に焼きむずみが見られる。胴外面の大部分および脚の中央部には巾5mmの先端が弧状のもので仕上げられている。

坏 (第18図27~36)

27は口縁径1.11cm・高さ2.9cm・底部(平底)径径6.9cmを測り、内外面とも横で仕上げであり、底部は回転へら切りで粘土塊から切りはなされている。焼成は甘い。28・29は共に口縁径1.11cm・高さ2.9cm・底部径6.8cmを測り、27に比して底部から胴部にかけてやや外反している。焼成は甘い。30は口縁径1.15cm・高さ2.6cm・底部径7.9cmを測り、径は2.8・2.9より少し大きい整形・焼成は2.8・2.9に類似する。31は、口縁がややむずみであり、口縁は1.12cm×1.05cmの楕円形を呈し、高さ3.2~3.9cmを測り、径2~5mmの石英・長石粒を多く含んでいるが整形はかなり良く、焼成温度はよく上がって一部に自然釉がかかっている。32は、口縁径1.19cm×1.08cmの楕円形を呈し、高さは3.8cmを測り、底部は回転へら切り起しとなっている。33は口縁径1.04cm・高さ3.8cmを測り、整形・焼成ともに良好であるが底部にはへら切りカスの粘土が詰まっている。34は、口縁に焼きむずみがあり、径は1.10cm・高さ3.6cmを測る。35は、口縁径1.06cm・高さ3.4cmを測り、乾燥しないうちに持ったため指紋がついている。胎土はよくほとんど砂粒はない。36は、口縁部の一部が焼きむずみのために内傾しているが、口縁径1.01cm・高さ3.1cmを測り、回転へら切り起し後、板の上のせて乾燥している。27~35は実室内出土で、36は奥道部出土である。

坏は、27~36の他に、図示しなかったが3個体分の小破片が石室内から出土している。

坏身(第18図37~39)

37~39の3個の坏身の出土をみたが、坏蓋はまったく検出しなかった。37は第3被葬者棺と西側壁の間、西壁に接して出土し、38は第3被葬者棺の棺蓋の石の下になっているのを検出し、39は第1被葬者棺と奥壁との間から出土した。37は器高3.6cm・最大径1.31cm・口縁径1.0cm・蓋受け部の立ち上がり0.6cmを測り、底は九底となっている。焼成は良好で下向きに置いて焼かれている。37は器高3.1cm・最大径1.18cm・口縁径9.8cm・蓋受け部の立ち上がり0.5cmを測り、底は径5.5cmの平底となっている。焼成は良好で灰白色を呈し、外面全体に淡緑色の自然釉がかかっている。39は器高3.6cm・最大径1.20cm・口縁径1.02cm・蓋受け部立ち上がり0.5cmを測り、底は径3.0cmの平底となっている。蓋受け部凸起は上方に立ち上がっている。前2者とは異なりへら削りがかなり上方で施されている。

坏(第18図40)

40は第2被葬者棺の棺蓋の間の床面で検出されたもので、第2被葬者棺の下から出土したといえる。器高6.5~7.0cm・口縁径1.79cmを測る。器蓋はやや外にひろがりながら上方にのびており、胴部に一条のへら書き凹線が施されている。

高台付坏(第18図41・42)

41は高坏25・26と共に狭道部の第4被葬者棺のすぐ奥で出土したものであり、42は墓道

成工事中に平塚などと共に出土したもので第4被葬者が棺に伴なうものであろう。4 1は器高3.7~4.2 cm・口縁径1.3 cm・高台の高さ0.5 cm・高台の径8.7 cmを測り、径にくらべ高さは低い。器壁は外にわずかに開きながら上方にのびている。4 2は器高4.7~4.9 cm・口縁径9.6 cm・高台の高さ0.6~0.6 cm・高台計4.8 cmを測り、器壁はやや開きながら外反して上方への口縁端部を薄くしている。焼成は悪く、酸化炎で焼かれていて、淡黄褐色~淡灰褐色を呈している。

甕(第19図43・44)

4 3は渡部郡の埋葬終了後にはおり込んだものであり、4 4は附隄底部から出土したものである。4 3は破片の一部が残存するのみであり、4 4は基壇造成中にその一部が出土しただけで残りの部分は基壇下に埋まっているものと思われる。4 3は、口縁径2.3 cm・頸径1.7 cm・頸部の高さ4.4 cm・胴の径4.7 cm以上をはかる。頸部外面には、へう先による刻線「×」印がつけられており、外面には青海波紋・外面には格子目のたきが施されており、外面はたき後、くしでなでられている。4 4は、口縁端部の出土を見ないので口縁径はわからないが、頸の高さ1.2 cm以上、頸径2.0 cm・胴の径8.8 cm以上を測り、高さは1 mを超えるものと推測される。頸部外面に1組2本の凹線が組めぐらされ、頸部を3つの区画に分け、その中央の区画にくしによる波状文を施している。

第五章 考 察

円通寺古墳の調査・整理を通して、次の諸点が提起できる。

- 1) 横穴式石室の玄室の長さは2.9 mやや短い、巾は2.4 mを測り、当地方としては最大級である。このことから被葬者の性格も限定が可能であろう。
- 2) 石室規模・推定埋葬遺体数に比し、装身具類が少ない(金環4個・勾玉2個・丸玉3個・切子玉1個・合計10個)。
- 3) 金環はいずれも耳につけたまま埋められたものであろうが、他の玉類は頸飾りを想起する位置からの出土ではなくて、遺体の足もとと思われる部分から出土している。このことから、少量の玉類は足もとへ副葬品として入れられたものであろう。
- 4) 古墳の築造時期はいつ、いつまで追葬がなされたか。

1)については、岡山県北西部に位置している新見阿智地方で玄室の巾が2 mをこえるものは、円通寺古墳の他に、新見市横見の横見古墳が知られている。横見古墳は、中国縦貫自動車道建設に伴って調査され消滅したもので、調査時には既に築造および玄室の一部は破壊されていたが残存玄室の長さは4 mをこえるものであった。これに比べて円通寺古墳のものは玄室の長さが短い。しかし、刑部平地を中心とする豪族の首長の墓であることはまちがいない。最近の調査で、刑部平地に奈良地割も残存していることがわかっている。

2)については、推定埋葬遺体5体のうちの3体が金環・玉類を持っていた。各1体のもつ量は、金環1対と丸玉1個、金環1対と勾玉2個・丸玉2個・切子玉1個、金環1対であり、他の2体は玉類は持っていなかった。玉類の量が経済的差によるものか身分的差によるものかは判断できないが、玉類がいずれも被葬者の足もとに入れられていたというのは、一般的に玉類は首かざりに利用されたとされているが、この円通寺古墳については二通りの解釈ができる。その1は、足もとに単なる副葬品として納めたであろうという考え方であり、その2は、これらの玉類は足りば足輪としていたという考え方である。その2の考え方は、さらに発展させると、玉類の着法が身分的階級的差を意味すると考えられないこともないかもしれない。

4)については、出土須臾器から判断して6世紀後半前葉に最初の埋葬が行なわれ、最後の埋葬は7世紀前半前葉に行なわれたものと判断できよう。

最後になりましたが、大佐町川添町長をはじめ、町当局・町教育委員会・町中央公民館の職員の方の御援助と御協力により、また炎天下の作業に従事していただいた方々の御協力により調査を終了でき、また、本書を発行していただき感謝の念にたえません。記して感謝の意を表します。また、本書が古代史研究の一途になれば幸いであり、合わせて文化財保護の啓蒙になればと念じております。なお、出土遺物については、大佐町中央公民館に展示・保管してあります。

あ と が き

このたびの円通寺古墳の発掘調査は、大佐町にとって有史以来の画期的なものであります。5,000町民のこの発掘調査に寄せる感心と期待は、誠に大きなものがあり、近年の地域開発と文化財保護が論じられているときを得た調査でした。

発掘調査の実施にあたっては幾多の困難もありましたが、寺院を始め墓地整備工事請負業者等関係者のご協力、発掘調査担当の田仲尚雄教諭の献身的な努力により貴重な成果をあげて終了し、この報告書を発刊する運びとなり同慶に存じます。

円通寺古墳の規模は橋北地域においても稀な大型古墳で今回の調査で他にもこのような規模の古墳の存在が確認されています。このことからおして千数百年前から小坂部が文化的にも経済的にも周辺地域の中心地であることも容易に推察できます。調査後は永久に遺跡として保存できるよう復旧工も完了しています。更に教育委員会としては古墳群出土品を町の重要文化財に指定し、保存保護をとるとともに郷土研究等の資料に供したいと考えています。

おわりになりましたが発掘から本報告書作成まですべてを担当された大佐中学校田仲教諭に真心の敬意を表します。

昭和53年3月

大佐町教育委員会

池 田 宏

写真 1



1. 横穴式石室狭道（入口側から）



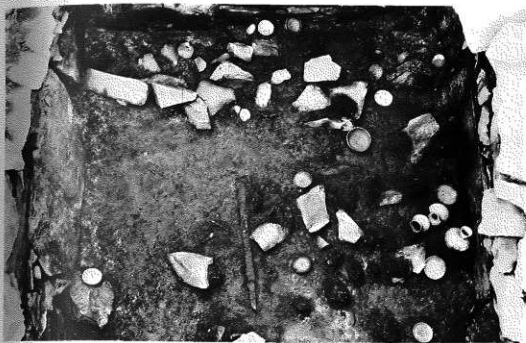
2. 横穴式石室袖部（玄室側）



1. 玄室奥壁



2. 玄室側壁(東側)



1. 棺台および遺物出土状態



2. 棺台および遺物出土状態

写真 4

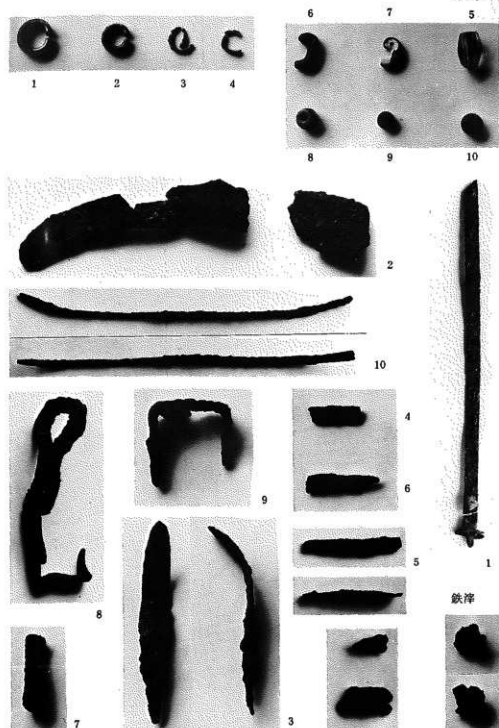


1. 遺物出土状態



2. 遺物出土状態

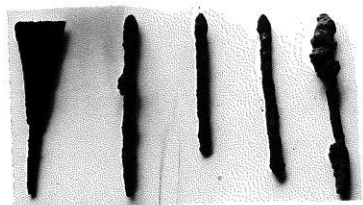
写真 5



装身具および鉄器

鉄斧

写真 6



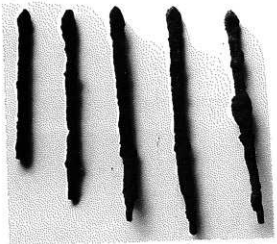
1

10

8

7

6



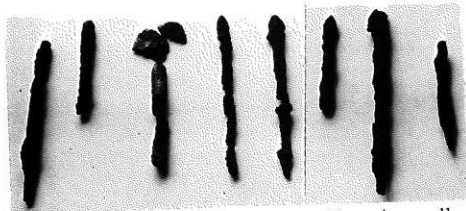
5

12

3

2

9



18

17

16

13

4

11

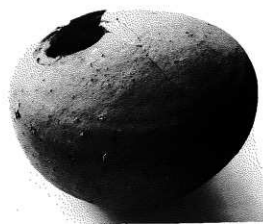
蒙

写真 7



釘

写真 8



1



2



4



3



5

須恵器 1



6

写真 9



8



9



10



40



41



7

須恵器 2



42

写真 10



27



28



29



30



31



32

須惠器 3



33



34



35



36



36~37-1



36~37-2

写真 11



39



37



38



13



12



11



14

須惠器 4

写真 12



15



16



18



19

須恵器 5



20



17



22



23

写真 13



22



25



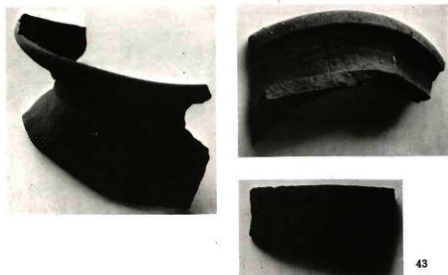
須恵器 6

24

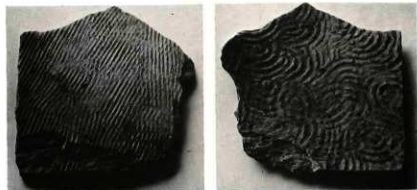


26

写真 14



43



44

須恵器 7



円通寺古墳

発行 1978.3.31

岡山県阿曾郡大佐町小坂部

大佐町教育委員会

印刷 新見市西方35

ひら印刷